

「区切り読み」を用いた英文読み取りの指導

安藤 富雄

日本福祉大学 情報社会科学部

The Teaching Method by Using “Slash-reading” in English Class

Tomio Andou

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 区切り読み

1. はじめに一英語が「読めない」学生

筆者は公立高校で38年間英語の教員生活を経て、1999年本学の情報社会科学部の英語担当教員に着任した(1997年から本学・経済学部で非常勤講師)。大学における外国語(英語)教育については、高校とは異なった理念と授業方法が求められることは予期していたが、まず痛感させられたのは学生の英文を読む力の不足である。もちろん個々の学生の学力には差があり、単語さえ調べれば、とくに難解な構文を含まない限り大まかな文意は読み取れる学生もいる。ここで単に「英文を読む力」と言ったのは、単語の意味を与えられても、短い英文でもその意味が読み取れないということである。

筆者が高校で教えていた38年間には何度かの学習指導要領改訂によって、その都度中学・高校における英語の学習指導の重点は変遷をたどってきた。それは社会構造の変化に伴って求められる英語の学力の概念が変わり、生徒の学力・学習姿勢も著しく変化してきた以上当然のことである。しかし大学受験人口の減少がはじまった1990年代から、大学に入学してくる学生のなかには、明らかに高校の検定教科書が(1年で履修する「英語I」

でさえ)、ほとんど理解できていない学生が増えてきた。それはいわゆる勉強不足による低学力化とか、日本語も含めた一般的読解力の低下では説明がつかない現象である。その特徴を筆者の目から見てまとめてみると次のようになる。

- (1) 単語の発音ができない(音声と文字との乖離)。
- (2) 教科書にくり返し出てくる基本的な単語の意味を覚えていない(かつて低学力生と呼ばれていた学生でも基本単語は知っていた)。
- (3) 与えられた英文をどこから訳したらよいか見当がつかない(彼らにとって英語はまるで暗号)。

したがって、英語と聞けばまるっきり手も足も出ない(出さない)学生が教室にいる。事実、中学1年から英語嫌いになり、まったく捨ててしまっていたと広言するものもいる。彼らにとって英語は、私たちがはじめてロシア語やアラビア語を見たときとほとんど同じで、暗号を解くようなものであろう。それは知能の問題ではなく、これまでの学習体験からくるものである。カタカナ語と称される外来語は理解できるし、英語を使って簡単な挨拶などはできる。ネイティブをまねてうまく発音もできるし、洋楽を通して

英語を聞きとる力も、終戦直後に学校で英語を習った私たちの世代よりもはるかにすぐれている。

2. 「英語の使える日本人」

2002年文部科学省の委嘱をうけた「英語教育改革に関する懇談会」は、『英語が使える日本人』を育成するための戦略構想を発表した。そのなかで、英語教育の達成目標が次のように挙げられている。

1. 国民全体に求められる英語力→中学・高校での達成目標を設定。
 - ・ 中学校卒業段階：挨拶や応対等の平易な会話(同程度の読む・書く・聞く)ができる(卒業者の平均が英検3級程度)。
 - ・ 高等学校卒業段階：日常の話題に関する通常の会話(同程度の読む・書く・聞く)ができる(高校卒業者の平均が英検準2級～2級程度)。
2. 国際社会に活躍する人材等に求められる英語力→各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定。

このような官の側からの英語教育に対する具体的な目標の設定は異例のことである。しかしこれは突如出てきたものではない。学習指導要領では、「(英語を)話す・聞く・読む・書く」という4技能に加えて、すでに1990年代から「外国語教育の目標」には「実践的コミュニケーション」という文言が入っている。現行の高等学校学習指導要領(2003年度実施)には次のように記されている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

1970～80年代には企業の海外進出に伴い、外国との人的な交流も盛んになり、外国人労働者の流入も増加した。それが国際化時代と言われ、実用的な英語(いわゆる「使える英語」)の習得の必要性が叫ばれるようになった。このような英語教育に対する要求は、単に経済界から出ているだけではなく、今までの学校教育では簡単な

英会話も身につけなかったという不満を持つ大人から、あるいは自分の子どもが自由に英語を話せるようになることを願う親に至るまで、いわば「社会の要求」になっている。それが学校教育に求められ、中教審を経て、学習指導要領に反映されてくるのは当然のことである。

3. 「実践的コミュニケーション」

外国語教育をめぐるこのような流れのなかで、この20数年の間には教育現場ではさまざまな変化が見られる。そのもっとも著しい特徴は、学校においてもっと使える英語を身につけさせようということである。学習指導要領の用語で言えば「実践的コミュニケーション」の習得である。それもとくに「話す」「聞く」に重点がおかれていて、従来からの大学入試問題で計られる学力とはかなりの違いがあるというのが実状である。筆者は1996年度まで公立高校で教壇に立ち、その後日本福祉大学においても英語教育に関わってきた(2007年退職)。その限られた立場からではあるが、この流れが現在の英語教育に及ぼしている影響と現状を概括すると次のようになる。

高校では、すでに1993年に「英語I」とともに「オーラル・コミュニケーション」が必修科目として設けられた。学校種別による外国語に関する設定科目のいっそうの多様化(教科書のレベルと履修単位数の格差の極端な拡大)が進んだ。授業では英語を聞いたり話したりする練習に力点がかれ、従来の4技能に支えられた総合的な英語の力をつけることが相対的に軽視されるようになった。英語を話すことに抵抗を感じる生徒、単純な反復練習になじめない生徒が多くなり、英語を放棄するものも出てきた。その結果英語の学力の二極化が進んでいる。

中学校では、すでに前回の学習指導要領改訂以来、教科書は会話中心の教材が多くなり、コミュニケーションの力をつけさせるために、音声指導を中心としたティーム・ティーチング(TT)による言語活動が主流となっている。とくにこの数年間に特徴的に見られるのは、少人数クラスの学級、様々な形態の習熟度別授業、それに選択授業を絡ませた複雑な授業形態をとっていることである。

小学校の英語活動は、1990年代の中頃から一部の実験校で試行されていたが、「英語第二公用語論」が出てからは、英語特区が各地に設けられ、全国の9割近い学校で国際理解教育の一環として英語活動が行なわれている。さらに教科として「英語科」を置く学校・地域も出てきたが、次の学習指導要領で小学校高学年では「外国

語活動」(英語活動)としてすべての小学校で必修化される方向が打ち出されている。

4. 英文の読取りの指導

このような英語教育の影響は大学に入学してくる学生の英語の学力にも顕著に現われている。それを一口に言うとは、前述したように、「英語が読み取れない」ことである。本学部における「インターナショナル・プレゼンテーション」(以下「インプレ」と略記)の授業は、学部発足以来日本人教師・外国人教師ともにすべて英語を使って行い、スピーキング・リスニングの指導に重点をおくことを基本としていた。しかし教師側の熱心な指導にもかかわらず、実際には授業についていくことが出来ない学生が多数で、担当教師からの発言や筆者自身の実感としても学力向上にあまり結びついていなかった。例えば、英文を書いたり話したりする指導では、単語はもちろん英語の基本的な構文(語順)を知らないとか、リスニングの指導として聞きとらせる英文の意味そのものが理解できない、などである。

このような事態を踏まえて、2001年度から週2回ある「インプレ」の授業うち1回を「reading」の授業として、担当する教師(主に日本人)は英文読取りを基礎から指導することにした。そのために「Basic Practice for Reading Skills in English」という共通テキストを作った。このテキストの目標は次の3点である。

1. 英文を左から読んで意味のまとまりをつかみ、「直読直解」の習慣を身につける。
2. 文の組み立て方、節と節のつながり、文と文の関わり方を理解する。
3. 意味のまとまりを意識して音読を繰り返し、英文がすらすら読めるようにする。

テキストのコンテンツは、高校で学習する文法シラバスを離れて、視覚的に英文を見てその構成を理解できるように、次の15のテーマを設定し、それぞれに「練習文」を付けた。

テーマ	主なタスク
1 述語動詞(V)	文の中の述語動詞を見つける
2 主語(S)	文の中の主語を見つける
3 目的語(O)	述語動詞に目的語があるかどうかを確かめ、自動詞・他動詞の区別をする
4 主語の前になる語句	主語の前にある副詞・副詞句(前置詞+名詞)・接続詞などを見分ける

5 主語の後にくる語句	主語と述語動詞間に来る語句(修飾語句)を確認する
6 重文(文+文)	対等につながっている文(節)と文(節)を見つける
7 副詞の働きをする文	文(節)が別の文(節)にかかっている関係を理解する
8 名詞の働きをする文	文の中で名詞の働きしている文(名詞節)を見つける
9 名詞の後にくる文	名詞の後にきて名詞を説明している文(形容詞節)を見つける
10 O+S+Vの節	目的語の後に文(接触節)がきて、名詞の働きをしている語句を見つける
11 挿入・付加されている文	文の中に割り込んだり、文の後に付け加わったりしている文(節)を見つける
12 副詞の働きをする句	不定詞・分詞・動名詞を含み文と同じような意味を持つ語句を見分ける
13 意味上のS+V	文ではないが、文中にあって「S+V」の関係をもつ語句に注意する
14 ディスコースマーカー	文と文の意味をつなぐ語句を見つけて、文意の流れを考える
15 スキミング	各パラグラフの主題を表す文を見つけて、それらをつないで大意をつかむ

なお各レッスンの「練習文」は300～400語の長文で、高校1年で使用する標準的な教科書(「英語I」)の本文レベルの難易度で、かなり綿密にwords, phrasesの注を付けた。さらに別刷でワークシートを作り練習問題を与えた。(このテキストは次年度から『英語長文読解・ポイント15』[三友社出版]として出版した。その際、各レッスンにはウォームアップ用に100語程度の長文、ポイントの解説、テーマを理解するための練習問題を新しく入れた)

5. 入学前指導の試み

このような対応によって学部全体の学生に対して英文のリテラシー向上を図ったが、英文の読解力に関しては、前項で述べた『英語長文読解・ポイント15』による指導も十分受け入れられない層が存在することもわかってきた。彼らにはこのテキストで用いている英文の理解の前提となる基礎的な知識が不足していた。それは本人の意欲とか、努力の欠如といった問題ではなく、生徒間の学力格差の著しい広がり、それに追い討ちをかけるように中学・高校に持ち込まれた「実践的コミュニケーション」を中心とする学習指導要領の実施に伴って、文字による英語の定着(読取り・文章表現)の低下が一因となっていることは否めない。それが生徒の英語嫌い・英語離れに拍車をかけ、中学入学当初から英語にはそっぽを向いてしまった学生が入学してくるようになった。

このような状況にあって、2004年度にAO入試によ

る入学生に対して、学部を越えて入学指導前指導を導入することが図られた。しかし指導方法をめぐって担当教員の間での検討が不十分であったため、その後1年間にわたって入学前の指導に関してワーキング・グループで検討が行い、その結果を受けて各学部で学生の英語学力の実状を踏まえた入学前指導が、2005年度入学生から実施されることになった。

本学部においては、「入学前指導」としてAO入試および附属高校推薦入学合格者を対象に、入学前のおよそ5か月前から指導を開始した。指導科目は英語と数学であるが、英語の場合は次の点に指導目標の重点をおいた。

英文読取りの前提となる単語（高校1年程度）の読み方（発音）をおぼえ、英文の基本的な構造を掴ませる。

この目的にしたがって、「入学前準備学習プログラム」という指導用テキスト（16ページ）を作成して、対象とする入学予定者に発送した。事前学習は自学自習になるから、テキストには、その目的と心構えを次のように記した。

英語をマスターする基本は、まず英文を繰り返し読んで（音読）、それを自分の耳で聞き（聞き取り）、それを自分で言えるようにする（暗誦）ことです。自分は英語が苦手だとか不得意だと思っている人も、案外この基本的な訓練を抜かしているのではないのでしょうか？ はやく英語が話せるようになりたい、英語の手紙が書けるようになりたい、英語が訳せるようになりたい—そんなことを願っている人も、この基本訓練を怠っていると、なかなか力がつきません。この学習ノートは、そのような訓練を自分でしていただくように、作製したものです。

事前学習の対象者はAO入試合格、附属高校入試合格者で、05年度は41名、06年度は34名であった。（05年度は視覚障害者1名・聴覚障害者2名、06年度は聴覚障害者は3名）

テキストの構成はStep IとIIからなり、Iは10ページで各ページに短文を5つずつ、IIは5ページでミシェル・エンデのMomo（文部科学省検定高校用教科書「英語I」“New Cosmos II”，三友社出版）を5つのパートに分けて用いた。

指導のポイントは、英文を意味のまとまりごとにスラッ

シュで区切り、その区切りごとの意味を考えさせ、それを繰り返し音読することである。Step Iの(1)を例に示すと次のようである。※区切り方については[参考資料](1)参照

Step I — (1)

1. A little girl/ in the picture/ is enjoying swimming/ with a dolphin. (dolphin「イルカ」)
2. He/ always/ lends me his notebook/ and shows me/ how to do my homework. (lend ～ 「～を貸す」)
3. **When** the deer arrived/ at the river,/ he looked very carefully/ around him. (deer「鹿」)
4. I had never thought/ **that** something like that/ could happen.
5. Rainwater and air/ enter the soil/ through the holes/ **that** earthworms dig. (enter ～ 「～に入る」 soil「土」 through ～ 「～通って」 dig ～ 「～を掘る」)

◇次の語句を持って短い英文を作りなさい。

- a. be enjoying ～ ing (～するのを楽しんでいる)
- b. how to ～ (～する方法)

学習作業として次の5点を指示し、3月中旬に全員に面接を実施して作業の点検を行なった。

1. 英文を区切り(/)ごとに訳してその意味を下に書く。
2. 英文を区切りごとに何度も音読する。
3. 区切りごとの日本語を聞いて（だれかに読んでもらう）、英語で言えるようにする。
4. 1文ずつ英文が言えるように暗誦する。
5. 各ページの下に指示された語句を用いて短い英文を作る。

6. 「区切り読み」を中心にした授業へ

6.1 この授業のねらい

本学部に入學してくる学生は、中学・高校における英語の学習歴はさまざまで、英語に対する興味も多様である。高校での英語の履修単位数には大きなバラツ

きがあるうえに、たとえ高校3年間で20数単位を履修してきても、英語（の学習）に積極的な関心を持つ学生は、実際にはきわめて少数である。英語学習の必要性を感じていないと言ってもよい。この傾向はAO入試・付属高校推薦入学者においてはいっそう顕著である。しかし一定の英語の学力がなくては、不本意な大学生活を送ることになる。入学前指導の効果については別途分析結果を報告したが、この指導だけで英語学習に関して他の入学生のレベルに近づいたとはもちろん認められない。そのような状況のなかで、入学前指導をさらに継続させて目標に近づけるために「インプレ」の授業は、AO入試・付属高校推薦入学者を対象とした特別クラスを作り、入学前指導に用いたテキストをもとに「区切り読み」を中心とした授業を1年前・後期にわたって実施した。（06年度は高卒認定で合格したものの内希望する学生2名もこのクラスに加えた）

この授業の目標を、2005年度の履修ガイドで次のように示した。

「インターナショナル・プレゼンテーション」の授業は、英語を使って自分の意見を発表する基礎的な力を養うことがねらいである。それには、まず何よりも英語の発音が正しくできること、英語で自分の考えや意見を書いたり、話したりできることが必要である。しかし一足飛びにそこまでの力をつけることは不可能であることは言うまでもない。学習には順序がある。それにはまず英文を読んでその意味が理解できる学力がなくては英語の学習は始まらない。

この授業は Reading であるから、まず英語の文字を正しく読めるようにすること、次に英文の仕組みを理解すること、それによって自分の力で（辞書の助けを借りながら）内容を読み取る力を身につけること、そしてそれを伸ばしていくことを目標に進めていく。さらには、覚えた英語の表現を用いて自分で英文をつくる練習をすることによって、正しい英文を書く力にもつなげていきたい。

学生には次の教材を持たせた。

- ①入学前指導用テキスト「入学前準備学習プログラム」
（06年度はこのテキストを改訂した『英文読み取りに演習ノート—Practice by Slash-reading, 詳細は後述）

②『英語長文読解・ポイント15』（三友社出版）

6.2 「読める」ための手順

上記の目標を達成するために用いた具体的方法は「区切り (sense group) 読み」である。これは筆者の命名であるが、一般には slash-reading とか chunk-reading とも呼ばれる。授業は年間を通してこの方法を中心にして進めたが、毎時間の授業（90分）の後半は上記の『英語長文読解・ポイント15』を用いて英語の基本的な組み立てを把握する練習を行なった。（この練習は4章で紹介した「練習文」を中心とした15のテーマで英文の構造の理解を図るものであるが、本稿ではその詳細を述べる余裕はない）

授業は次の5段階の手順 (procedure) で行なう。

- ① [準備] 英文を区切りごとに訳してきて、授業で意味を確認する。
- ② [音読] 英文を区切りごとに正しく（正確な発音で）読めるように繰り返し練習する。
- ③ [暗唱] 区切りごとに日本語を聞いてそれに相当する英語が言えるようにペアで交互に練習する。
- ④ [確認] 一人ずつ教師の前で暗誦する。（合格印を押す）
- ⑤ [発展] 英文を自分で区切って読めるようにする。（これは後期の授業から実施）

この授業では③が学習活動の中心になるが、②の音読がその前提となる。そのため時間をかけて反復練習させることがポイントである。なお、①の訳は各自の予習に任せ、授業では確認をするだけに留めた。音読は sense group ごとに区切られた日本語を聞いて瞬間的に英語で反応できる訓練をすることになる。この練習の積み重ねによって、口頭または文章での英語の表現力、さらには英文の聞きとり・読み取りの能力の向上につながるこれがこの方法の目標である。区切りごとの音読と暗唱を繰り返すことによって、最初は暗号の羅列のように見える英文にも節（ふし）があることが見えてくることを期待している。さらにその節ごとにまとまった意味があることに気づいてくると、その意味を考える意欲を持ってくるはずである。学生たちのおかれている言語環境を考えれば、英語の場合は文字と音とのつながりがわかり、英語が読めることが学習の前提である。言葉は音と文字によって人間の考えや意思を伝え合うものである以上、それを読み解く

術を知れば、だれでも言語を学ぶ意欲はわいてくるものである。それは他者から強いられて行なうものでもないし、功利を動機としなければ成り立たないものでもない。人間に備わっている本性みたいなものだと考えられる。

6.3 教材のコンテンツと扱い方

『英文読み取り演習ノート』をテキストとして使用した2006年度の授業では、「区切り読み」を次の5つのステップに分けて行なった。

ステップ	学習方法	教材	配当時間
I	区切りごとの訳、音読、暗誦	“Momo” (M・エンデ著『モモ』の英訳から)	5
II	区切りごとの訳、音読、暗誦 (部分)	short passages を5つ	5
III	文ごとの訳、速音読 (時間制限で)	“Gon, the Little Fox” (新美南吉著『ごんぎつね』の英訳から)	4
IV	区切りごとの訳、内容把握	“Reaching for Dream” (黒人初のメジャー・リーグ選手J・ロビンソンの物語) ※ [参考資料] (2) 参照	7
V	区切り入れ、一部全訳、内容把握	“My Brother Oliver” (重度の障害をもった兄について書いた実話) ※ [参考資料] (3) 参照	4

I～IIIは上記のテキストにあるもので、IV、Vはハンドアウトとして授業時間ごと配布した教材である。

- ①「I、II」の「暗誦」は、ペアになった相手に区切りごとの日本語を言ってもらってそれを暗誦する。その授業の時間内か、(自宅学習を期待して)次の時間までに済ませる(合格する)ことを原則とする。各ステップで扱う教材の数(テキストではページ数、ハンドアウトは枚数)は「配当時間」の時数と一致する。ということは、各時間に1ページ、または1枚ずつの教材を使うことになる。
- ②「III」の「速音読」は語数約120～180のストーリーを、制限時間(60秒)以内で発音の間違ひなく読めること(3箇所の間違ひまでは認める)ことが基準である。教材には区切りは入れてないが、自分でスラッシュを入れて文意を考え、センテンスごとの訳を書いてから読みの練習をさせる。
- ③「IV、V」は、与えられた passage を区切り読みによって大意を掴む練習である。「IV」は全訳、「V」は部分訳としたが、いずれも区切り読みで速く内容を理解し、内容を問う設問に答えさせる。

7. まとめ—「訳す力が少しついた」

「区切り読み」は、高校において20数年前から筆者が試みてきたものである。この方法は特に英文の読取りができなくて学習意欲を失っている生徒に、学習のきっかけを与え、読取りの know-how を教えるために考え出したものであった。最初は、区切り読みの学習プリントを作って、通常の授業で使ったり、あるいは難解と思われる教科書教材に限って区切り読みをさせたりという部分的なものであった。その効果については特に調べたわけではないが、予習にも授業にもまったく取り組まない生徒が、とにかく授業中には眠ることもなく手を動かしていたこと、インセンティブを与えることによって(暗誦ができると合格印を捺すなど)、積極的に学習に取り組むようになった。それが彼らの英語の学力にどのように影響を与え、テストなどの点数にどのように反映したかはわからない。

大学の授業を担当するようになってからも、場合に依じてこの方法で英文読み取りの練習をさせた。本学の入学試験で、推薦試験だけでなく一般試験においても英語の学力検査の洗礼を受けなくても合格できるようになって以来、前述したように入学生の中に著しい英語の学力差が生じたことは事実である。その対応策の一つとして、「インプレ」では2002年度から学生の希望によって基礎クラス(2クラス)を設けた。筆者が担当した基礎クラスでは、英文読み取り演習として「区切り読み」を中心に授業を進めた。それをさらに年間を通して体系的に教えるようになったのが、この「研究ノート」で報告した2005・2006年度の入学前指導とそれに続くAO入試・附属高校推薦入試合格者対象クラスの授業である。

「区切り読み」の授業でどれだけ英語を読む力がついたのか、その測定はむづかしい。筆者は数年前から高校生・大学生の英語の学力を測定する目処として、簡単な「単語力テスト」と「読解力テスト」を作成して使っている。「単語力テスト」は主に高校1年の教科書で扱われている英単語の習得度を調べるものであるが、高校の教師や本学の他の教師の協力を得て数年にわたって実施してきた。調査の対象が少なく限られているので、どこまで結果が信頼できるか疑問もあるが、この「単語テスト」の結果と全般的な英語の学力とはかなり相関関係があることがわかっている。「読解力テスト」は100語の比較的やさしい英文(アメリカの小学校6年生が使っている教科書を参考にした)を決められた時間でどれだけ正

しく読み取れるかを測定する検査である。この2つのテストを学年の初めの4月、終わりの1月に行なって(同一の問題)、「区切り読み」の授業による英語力の伸張を測ることを試みた。35～39名のサンプルであるからあまり確かなことは言えないが、単語力では50点満点で平均点は2～3点の伸びしか見られないが、高得点者は増えた。読解力ではあまり変化は見られなかったが、少なくとも低下はしていなかった。

しかし問題は、この授業を受けた学生の英語の学習への関わり方と姿勢がどのように変わったか、あるいは変わらなかったか、である。06年度後期試験の際に学生に授業についての感想を書くように求めた。最後にまとめて代えて、そこで記述のあった感想をすべて紹介する(いずれも原文のまま。下線と[]内は筆者)。なお、文末の()内は性別・AO入試/付属推薦/スポーツ推薦/高卒認定/編入の別と、入学時に行った単語テスト(50満点)の得点・学年末評定である。(*は聴覚障害学生,**は肢体障害学生)。

- ①区切り読みは初めてやったけど、一文をいっきに訳すより、文と文の区切りが分かったので楽に訳すことができてよかった。この授業で訳すことが前よりも上手になった気がします。(女・AO・12・A)
- ②区切ると英語が分かりやすく(読取りなども)なるので良いと思う。早読みなどが楽しかった。(男・付・25・A)
- ③意味を理解するのに良かった。(男・AO・30・A)
- ④高校の時とやり方が似ていてわかりやすかった。(女・付・14・B)
- ⑤(1)私にとって凄く大変でしたが、ただ丸暗記するだけでなく、理解する大切さを知った。(2)予習・復習が少なすぎたのが反省点です。もっともっと勉強しないといけないなと思った。授業は厳しい感じだったけれど、基礎をしっかりとやってくれていて、中味の濃い授業でした。(女・認定・5・C)
- ⑥「区切り読み」は話の流れがよくわかった。日本語にするとときも区切ってあることで訳しやすかった。とても区切り読みは役に立った。(女・A・20・A)
- ⑦[自分としては]よくやったと思います。ジャッキー・ロビンソンとオリバーのプリントはがんばった。(男・付・17・B)
- ⑧一つ、一つの区切りで意味をとっていったので苦手な私にとってはわかりやすい授業システムでした。この授業は内容がそれほど難しくなく、とてもわかりやすかったので良かったです。自分で言うのもなんですが、英語の力はついたのではないかと思います。(男・付・18・C)
- ⑨区切り読みをやると、非常に英語を分かりやすく読み取ることができた。これから、このやり方で訳していけばできると思った。(男・AO・20・A)
- ⑩区切り読みはわかりやすかったです。でもちょっとスピードが早く途中からついていけなくなってしまった点もあります。良かった点は、英語はあまり好きな方ではないんですが、以前より前向きに取り組めたと思います。(男・AO・8・D)
- ⑪区切り読みの授業を受ける前はどこを区切ればいいのかさっぱりだったが、なんとなくわかるようになったと思う。前期あんしょうがまったくできなくてテストの点がひくく、後期に入っていやになり、さぼりがちになったのを今こうかいしている。中学の頃から英語がとてもきらいで、まともに授業を受けたことがなかったが、今回はガンバッタほうだと思う。(男・AO・14・D)
- ⑫どうしてこうなるのか、どうしてこう訳すのか、理解できませんでした。(男・編・18・C)*
- ⑬区切り読みをすることによって、読みやすかったし、訳をしやすくなったと思っている。また読む力もついてきたかもしれない。(男・AO・30・B)*
- ⑭むずかしかったです。でも長文が嫌いで見ただけ嫌やったけど、区切り読みをすることで英文を訳しやすくなりました。欠席も一度もしなかったし、暗しょうや読みを全部できたことがよかったです。(女・AO・12・A)
- ⑮高校までと読み方が違って、意味がとりやすかった。英語を訳す力が少しついたと思う。(男・AO・27・A)**
- ⑯長い文などで[区切り読みを]使った時に、とても内容が分かりやすくなったし日本語が作り安くなった。毎回プリントの宿題が出されたのがよかった。やっている時はとても大変だったが、電子辞書を使うきかも増えたとし、英語について考えることもできた。(男・AO・15・B)
- ⑰わかりやすく良かったです。暗しょうや速く読むなどの課題は難しすぎてぜんぜんやる気になれませんでした。けど、授業の進むペースはとてもよかったです。(男・ス・15・C)

※ [参 考 資 料] (1)

英 文 の 区 切 り 方

「英文を区切る」と言っても、とくに決まった規則があるわけではないが、この授業では次のようなことを目途とする。区切る場合はグループの前後に / (スラッシュ) を入れて示す。ただし、文頭・文末の / は省略する。

1 . センス・グループ (意味を持った語のかたまり = 句) は前後で区切る。

(1) 前置詞ではじまる句 -- 「前置詞 + 名詞」

The girl/ **in the mirror**/ smiled.

On the bookshelf/ there were lots of pictures books.

(2) 不定詞ではじまる句 -- 「to + 動詞の原形 ~」

My dream is/ **to become a nurse**.

To study abroad/ will be a wonderful experience.

(3) 分詞ではじまる句 -- 「分詞 (現在分詞・過去分詞) ~」

Soccer balls/ **made by Indian children**/ are used in Japan.

He spent the holidays/ **reading books**.

(4) 動名詞ではじまる句 -- 「動名詞 ~」

Please stop/ **cutting the trees**/ in the forests.

Watching birds/ is a lot of fun.

(5) 副詞または副詞の働きをする句

They would have to leave the country/ **immediately**.

In summer/ we take a three-month vacation.

2 . 節 (S + V を含む) は一つの文と考える (節を導く語は でかこんである)。

(1) 名詞節 — 接続詞 that, if, whether や what, who などの疑問詞で始まる。

I think/ **that** we must get along with other animals.

I don't know/ **what** his name is.

(2) 形容詞節 — 関係代名詞、関係副詞で始まる。

The boy/ **who** broke the window/ is Jack.

I've never been to the place/ **where** my father was born.

(3) 副詞節 — when, because, if, as など、従属接続詞で始まる。

I like her/ **because** she is very kind.

When I was a little boy,/ I used to play/ in the river.

(4) 等位節 — and, but などの等位接続詞で2つ以上の節 (文) がつながっている場合 (重文) は、等位接続詞の前後で別々の文と考える。

Grandpa went to the mountains/ and /Grandma went to the river.

- ・ 節の中もセンス・グループごとに区切る。

I remember/ **that** you asked me/ about the desert/ in Africa.

3. 次のような場合は区切らない。

- (1) 名詞の前にある修飾語句（冠詞、形容詞、形容詞の働きをする語句）

I saw an old lady/ in the kitchen.

A lot of people surrounded the building.

- (2) 述語動詞の中にある副詞や助動詞

I have already finished my homework.

You may not use a mobile phone/ in the train.

- (3) 語（句）と語（句）が対等に接続詞でつながれている場合

His parents are kind and open-minded.

- ・ 述語動詞と述語動詞をつなぐ接続詞はその前で区切る。

She ran downstairs/ and went into the dining room.

- (4) 述語動詞とのつながりが強い不定詞、分詞、動名詞など

You must try to help yourself.

The children came running/ into the room.

I don't feel like eating/ this morning.

- (5) 特定の「be+形容詞」の後に決まって用いられる不定詞、「前置詞+名詞」

I was afraid to see the sight.

He is proud of his native town.

- (6) 動詞の後にきて動詞を修飾する副詞（様態）、形容詞・副詞・名詞を前から修飾する副詞

The father scolded his son severely.

We are very good friends.

The flower has such a lovely name.

[参考資料] (2)

「区切り読み」練習 STEP IV

前期の授業で練習した「区切り読み」で英文の読み取りを行ないます。区切りごとの意味を英文の下に書いて、英文を何度も声を出して読みなさい。

Reaching for a Dream
(1)

In 1944, / young Jackie
Robinson was a soldier / in the
U.S. Army. One day, / he visited
his unit's baseball coach.

"Can I join the team?" / asked
Jackie.

"Sorry, pal," / replied the
coach. "Black soldiers can't
play / on our team. That's a rule."

"What? You mean / **that** I can join the army / and serve my
country, / **but** I can't play baseball / with my buddies?"

When Jackie left the army, / it was hard / to find work.
He needed money, / **so** he joined a Negro-league team.
Major-league baseball was not open / to blacks / at that time.



【93】

the U.S. Army. 「アメリカ陸軍」 unit 「(軍隊の)部隊」 pal
「(仲間や同僚に向かって)きみ」 serve ~ 「~に奉仕する」
buddy 「仲間」 Negro-league 「黒人リーグの」

(Q) ジャッキーはなぜ部隊の野球チームに入れなかったのか。

Class	No.	Name	(IV)-1
-------	-----	------	--------

[参考資料] (3)

「区切り読み」練習 STEP V

My Brother Oliver

(1)

▼(1) I grew up in the house where my brother was on his back in his bed for almost 33 years. Oliver was blind and mute. His legs were twisted. He didn't have the strength to lift his head nor the intelligence to learn anything.

Today I am an English teacher, and each time I introduce my class "The Miracle Worker," the play about Helen Keller, I tell my students about Oliver. ▼(2) One day, during my first year teaching, a boy raised his hand and said, "Oh, Mr. de Vinck. You mean he was a vegetable?"

I stammered for a few seconds. My family and I fed Oliver. We changed his diapers and hung his clothes and bed linen on the line.

We bathed Oliver. We trickled his chest to make him laugh. Sometimes we left the radio on in his room. ▼(3) We pulled the shade down over his bed in the morning to keep the sun from burning his tender skin. We listened to him laugh as we watched television downstairs.

"Well, I guess you could call him a vegetable. I called him Oliver, my brother. You would have liked him. 【192】

on one's back「仰向けに寝て」 **mute**「言葉が発せられない」
intelligence「知能」 **each time** ~ 「~するたびに」 **"The Miracle Worker"**『奇跡の人』 **Helen Keller**「ヘレン・ケラー」 **Mr. de Vinck**
「デビンク先生」 **You mean ~ ?**「~という意味ですか」 **stammer**「口ごもる」
second「秒」 **diaper**「おむつ」 **bed linen**「ベッドのシーツ」
trickle「くすぐる」 **leave ~ on**「~をつけたままにしておく」 **shade**「(日よけの)ブラインド」
keep ~ from ...ing「~が...するのを防ぐ」 **would have liked him**「(もし彼に会っていたら)彼を好きになっていただろう」仮定法過去完了形

▼ 訳を書いてみよう

- (1) _____

- (2) _____

- (3) _____

◆ **内容を確かめよう** 次のことについて、日本語でまとめなさい。

- (1) Oliver の状態はどのようなであったか。
- (2) 文中の “I” の名前、Oliver との関係、職業。
- (3) 家族の人たちは Oliver にどんな世話をしたか。
- (4) 一人の男の子に “You mean he was a vegetable?” とたずねられて、筆者は何と答えたか。

Class	No.	Name	(V)-1
-------	-----	------	-------